



# 第4回 初めての古文

## 考え方

### 問一

①をふくむ一文が『蘭学事始』の説明です。

『蘭学事始』は、江戸時代の蘭学者杉田玄白が、日本で初めて西洋の解剖書をオランダ語からほんやくしたときのことを、そのときの苦労や工夫を、回想しているお話です。(1~3行目)

この一文から、設問の「三十文字以内」という条件にあうようにまとめましょう。解答に必要な部分を見きわめることが大切です。

### 問二

②をふくむ段落では、文末が「〜とか。〜とか。」となっていることからわかるように、『蘭学事始』に書かれていることがしうかいされています。

西洋の解剖書の人体図は、東洋医学の人体図とはあまりにちがうので、実際の「腑分け」を見たくなり、刑場へ行って、刑死人を解剖してもらいながら、<sup>②</sup>図のいちいちを確かめたとか。辞書もない時代のほんやくだから、ひとつのことはをやくすのに、長い間あれこれ考えたとか。

まず、「刑死人を解剖してもらいながら」「いちいちを確かめた」のですから、「図」とは「人体図」のことです。

「ド」ということが用いられている「木の枝を切ったところ」「庭そうじのあとのゴミや土があつまるところ」と、「鼻」との共通点をさがしていますね。

- ・木の枝を切り落とすと、切ったところがフルヘツヘンドする。
- ↓木の枝を切ったあとは「もりあがる(うずたかくなる)」。
- ・庭をそうじすると、「ミヤ土があつまってフルヘツヘンドする。
- ↓「ミがあつまれば」もりあがる(うずたかくなる)。

鼻は顔のまん中で (A) いるもの。

結論＝フルヘツヘンドは「うずたかい」という意味ではないか。

これらの共通点は「もりあがっている(うずたかくなっている)」ということ。 (A) にはこのことが入りますね。直後の「いるもの」に続くように形を変えましょう。

「もりあがって」「うずたかくなって」の二つが考えられますが、設問の「六字」という条件にあうのは、「もりあがって」ですね。

### 問五

④をふくむ段落の内容を見ていきましょう。

初めての古文＝『蘭学事始』  
↓ときどきに現代(ことば)に置きかえて、わからないところは好き勝手に置きかえて、ホンヤクした。  
↓ろくな出来ではなかったが、「古典は読める」「どんなに読めなくても読んでしまうことばはできる」という自信がついた。

次に、「西洋の解剖書の人体図」なのか「東洋医学の人体図」なのかを考えましょう。問一でも確認したように、『蘭学事始』には「西洋の解剖書をほんやくしたときのこと」が書かれているのでしたね。杉田玄白は、今まで日本にあった「東洋医学の人体図」とはあまりにちがう「西洋の解剖書の人体図」を手にして、真実を知るために「実際の「腑分け」を見て確かめたのです。答えは「西洋の解剖書の人体図」です。十字という条件にもあてはまりますね。



「西洋の解剖書の人体図」は、「東洋医学の人体図」とどのようちがっていたのかな。

### 問三

③の直前を見てみましょう。

ヒトが一所懸命考えてるってのは、どんな古文でも、何語でも伝わってくる。

ここから、「伝わってくる」のは、「ヒトが一所懸命考えてる」ということだとわかります。

また、設問では「このとき、筆者には何が伝わってきたのですか」と問われていますね。「このとき」とは、玄白たちが「フルヘツヘンド」ということを考えているときのことです。「一般的な「ヒト」ではなく、「だれ」が考えているのかを具体的にまとめてみましょう。

### 問四

玄白たちが、「鼻」のところに出てきた「フルヘツヘンド」ということばの意味を考えている場面です。同じく「フルヘツヘン

筆者にとつての「初めての古文」とは、『蘭学事始』のことです。ヤダ先生の言うとおり、わからないところは適当におぎないながら自分の読みたように読んだのです。ほんやくしたものは「ろくな出来じゃなかった」のですが、それでも筆者には「古典は読める」という自信がいたのでした。答えはウです。

うまくほんやくできなかったことを「残念に思っている」わけではないので、アはあやまりです。また、「ときどきに現代ことばに置きかえて」いますから、イもあてはまりません。エのように「いやになっている」でもありません。



正確なほんやくでなくても、とにかく読めた」という達成感が、筆者にとって大きな自信につながったんだね。

問六 ⑤の直前に「そういうものに」とあります。「そういうもの」の指す内容が、筆者が「出会った出会った」ものですね。35行目からの内容を確認しましょう。

わかんないことばを、がむしやらにつきとめようとする熱意。

あの古文の授業で、たまたまでしたけど、**そういうもの**に出会ったわけです。

「そういうもの」とは、「わかんないことばを、がむしやらにつきとめようとする熱意」ですね。この二十七字が答えです。

『蘭学事始』は、玄白たちが西洋の解剖書を日本語にほんやくしたときの苦労や工夫が書かれた本でした。問四で確認したように、たとえば「フルヘツヘンド」ということばの意味を、さまざまな類

推をくり返しながらか必死につきとめようとするのです。こうした玄白たちのすがたに対する筆者の思いは、次の部分から読み取れます。「鼻は顔のまん中でもりあがっているものだから、フルヘツヘンドは『うずたかい』という意味じゃないか」という答えにたどりついたときの感動は、どきどきと伝わってきて、いまだに、ありありと覚えています。(25〜28行目)

筆者は、玄白たちの「わかんないことばを、がむしやらにつきとめようとする熱意」に心を打たれたのですね。なお、玄白たちのこうした熱意は、筆者自身が『蘭学事始』を読み解こうとする思いと重なっているということをおさえましょう。

——⑤のあとに「それ以来、筆者もがむしやらに生きている」、「選んだのが別の本だったら、生きかたも変わっていたかもしれない」とありますね。『蘭学事始』は、筆者の人生に大きなえいきょうをあたえたのです。



問七 ——⑥のあとの内容を見ていきましよう。

わからないことばがあると、ヤダ先生の声が聞こえてくる。

・「わかんないところは適当におぎなって読んじませ」  
・「原文どおりじゃなくてもいいんだ、自分が読みたいように読めばいいんだ」

↓先生の言ったとおり、自分が読みたいように読んでいるし、楽しく読める。

# 自由作文

## 考え方

問一 (1) わたしたちは、日々ことばを使う中で、思わず口に出したことで相手をきずつけてしまったり、逆に、だれかのちょっとしたことばに救われたりすることがあります。ことばは、人間にとって意思を伝えるための「手段」であるだけでなく、それ以上の力を秘めているとすることができているのではないのでしょうか。ここでは、「なるほど」と思って納得したことが、言われてうれしかったことは、落ちこんでいるときにはげまされたことばなど、印象に残っていることばを思い出してみましよう。

「いつもそばに置き、自分のいましめやはげましとする」とは「このことを「座右の銘」と言います。これを機会に、何か一つ、いつも自分の心に留めておけることばを見つけてみるのもよいでしょう。」



(2) 「何となく好きだから」というだけでなく、そのことばが自分の心に引っかけた理由を考えましよう。たとえば、同じ「ありがとう」ということばでも、それを言われたときの状況によって、

この部分をまとめます。「わからないところは適当におぎない、自分の読みたいように読んでいる」「楽しく読んでいる」という二つの要素をふくめてまとめましよう。

ヤダ先生は、「古文は、たとえわからないことばがあっても、楽しく読むことができる」ということを筆者に教えてくれたんだね。



## 答え

問一 杉田玄白が、西洋の解剖書をほんやくしたときの苦労や工夫。(28字)

問二 西洋の解剖書の人体図

問三 玄白たちが一所懸命考えているということ。

問四 もりあがって

問五 ウ

問六 わかんないことばを、がむしやらにつきとめようとする熱意

問七 わかんないところは適当におぎない、自分の読みたいように楽しく読んでいる。

自分の受ける印象はことなりますね。もし自分が落ちこんでいるときであれば、いつも以上にうれしく感じるかもしれません。どのようなときにそのことばと出会い、自分がどう感じたのか、具体的に書くことがポイントです。

問二 人との出会いによってえいきょうを受けることがあるのと同じく、ことばとの出会いによって、えいきょうを受けた点はないでしょうか。そのことばを思い出すと元氣になったり、同じ失敗をくり返しそうになったときに反省したりと、そのことばが自分の生き方にえいきょうをあたえていないか、考えてみましよう。

## 答え

問一 [例] 案ずるより産むが易し。

(2) [例] 学校の児童会長に立候補するか迷って先生に相談したところ、「案ずるより産むが易し」だよ」とはげまされ、立候補した。当選し、実際にやってみると、意外に楽しく務めることができ、「案ずるより産むが易し」ということばは本当だと実感したから。

問二 [例] 何かをしようと思うとき、心配や自信のなさが先に立ち、一步をふみ出せないことがある。そんなときは、「案ずるより産むが易し」ということばを思い出し、あまり心配しすぎず、とにかくやってみることにしている。このとき先生にはげまされ、無事に児童会長を務めた経験が自信になっていると思う。